

## シラバス参照

科目名	文化社会学
科目名(英文)	cultural sociology
学部	現代社会学部
学科	現代社会学科
配当年次	1年
クラス	
単位数	2
履修区分	選択科目
学期	前期
授業担当者	樫田 美雄
ディプロマポリシー(DP)	DP1◎,DP2◎,DP3◎,DP4◎,DP5◎,DP6◎,DP7○,DP8○
科目ナンバリング	GDG1008a0

授業概要・目的	文化社会学は、社会学の一部であると同時に全体でもある。既存の文化を分析対象とするとき、それは「文芸社会学」や「演劇社会学」や「映画社会学」や「音楽社会学」等の諸・連字符社会学の集合体として、社会学の一部である。しかし、「文化現象として扱えるすべてのもの」を分析対象とするとき、それは社会学のフロンティアを切り開く活動そのものであり、「人々の世界認識」を扱う点で、社会学全体であるとも言えよう。本講義では、「現代社会学部的文化社会学」を講じる。すなわち、前者の狭義の文化社会学から入って後者の広義の文化社会学までの展望を内在的に呈示してみせる。そうやって「社会学的思考の発展を体験しつつ、社会学が、人々を説明する社会学から、人々から学ぶ社会学に自己革新している現況」を実感してもらう。具体的には、諸君の生活経験のあり方そのものが現代文化の実相である、ということを実感してもらいたい。これが本講義の目標である。			
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 文化社会学の低位領域である小説や伝記や評論を扱う「文芸社会学」での議論の仕方と概要を説明できるようになる。</li> <li>② 文化社会学の低位領域である漫才や文楽やミュージカルやオペラを扱う「舞台芸術社会学」での議論の仕方と概要を説明できるようになる。</li> <li>③ 文化社会学の低位領域である写真やアニメや映画を扱う「映像社会学」での議論の仕方と概要を説明できるようになる。</li> <li>④ 広義の文化社会学が、推論実行機械としての人間の行為全般を扱うものであることを、例示しながら説明できるようになる。</li> <li>⑤ 授業内で創作発表をする学生は、自らの創作活動が文化活動であるとともに、社会的活動でもあるということが多面的に理解できるようになる。</li> <li>⑥ 創作活動に対する簡単な評論ができるようになる。</li> </ol>			
授業方法と留意点	本講義は、部分的反転学習の形式でおこなう。文化体験なくして文化社会学を実践することはできないからだ。まず授業の前半では、作品の呈示と分析の両方を行う。しかし、授業期間の中盤以降では、学生各自が、自力で「文化作品/文化現象」を鑑賞/体験すること、と、その鑑賞/体験を授業内で級友にプレゼンすることが重要となる。授業期間末においては、グループ・ワークを活用して、作品を作るか、作品鑑賞をするか、いずれにしても、文化に参与させる地点にまで諸君を促すことが、本授業の方法となる。課題や質問等についてのフィードバックの機会は適宜設ける予定である。			
科目学習の効果(資格)	本講義は社会学の分野としての「文化社会学」について学ぶ科目であるとともに、「社会現象を文化現象として研究する」という「社会学方法論」の授業でもある。したがって、「文化社会学」の領域的知識が身につくとともに、「社会学」の方法(あるいは、視角=パースペクティブ=も身につく科目になっている。結果的に、1年前期配当科目にふさわしく、1年後期以降の社会学の学習の基盤となる科目である。			
授業計画	回数	授業テーマ	内容・方法等	事前・事後学習課題
	1	文化社会学概論	文化社会学は、社会学の一部であると同時に全体でもある。 (※『現代文化を学ぶ人のために』&『当事者宣言』の社会学) ※今後の授業の進め方の解説もする。	事前:シラバスの理解(何が課題となっている授業なのか、考えてくる) 事後:<当事者宣言>に相当するものを社会の中から探す
	2	文芸社会学1	「走れメロス」と「山月記」の「裏の物語」は裏なのか? (出口智之2021in渡部他『国語をめぐる冒険』岩波書店)	事前:「走れメロス」と「山月記」を読む 事後:学習課題の学習
	3	文芸社会学2	『羅生門メソッド』という発想と「人々から学ぶ生活社会学」 (※黒澤明『羅生門』、オスカー・ルイス、『大杉栄自伝』)	事前:映画『羅生門』をみる(推奨) 事後:学習課題の学習
	4	文芸社会学3	「社会を説明する社会学」と「社会から学ぶ社会学」の対比。	事前:ここまでの授業過程を総括してこよう 事後:学習課題の学習

		(近森高明「タグつけされる世界と「くくり」の緩やかな秩序」)		
5	小括	各自の「文学体験」を語り合おう。各人の「創作体験」を語り合おう。「社会を表象するものとしての文化」と「文化によって創られる社会」の相互反映性を語り合おう。	事前: 各自の文学体験/創作体験を纏め直してこよう 事後: 学習課題の学習	
6	舞台芸術社会学1	吃音の可能性を拓く(言い難そうにする効果としての真実性) (※井上ひさし『日本人のへそ』、吃音と東北弁の類同性)	事前: 言いにくそうにする意味について考えてくる 事後: とにかく「舞台」を見に行く。繁昌亭でもいいし、吉本系でもいいし、宝塚歌劇でもいいし、オペラでもいいがどれかには行く。	
7	舞台芸術社会学2	落語と漫才の社会学。誰が誰を笑っているのか。再帰性問題。 (※アンジャッシュ『障子をへだてて』における聴衆の位置)	事前: 落語はなぜ1人の演者なのに対話に聞こえるのかを考えてくる 事後: とにかく「舞台」を見に行く。繁昌亭でもいいし、吉本でもいいし、宝塚歌劇でもいいし、オペラでもいいがどれかには行く。	
8	映像社会学1	故実皮膜の彼方、あるいは、映画としての人生。 (※是枝裕和1998『ワンドフルライフ』における嘘と願望)	事前: 『ワンドフルライフ』(119分、アマゾンプライムにあり)の事前視聴を強く推奨する 事後: 真実と嘘をテーマとした諸映画作品の複数の視聴を強く推奨する(たとえば『プレードランナー』)	
9	映像社会学2	写真を読む。ダブル・コンティンジェンシー(二重の条件依存性)問題の実践的解決。 (※中塚朋子他2010「写真鑑賞場面における相互行為分析」)	事前: 15年以上の前に撮影された写真を探して、何が読み取れるか考えてくる(教室に持参することを推奨)。自分に創作体験がある学生は教員に何分でプレゼンテーションが可能か申し出る準備をしてくる 事後: 学習課題の学習	
10	文化社会学の現在	ファン参加型文化としての『マトリックス』と『コミケ』。創作体験のある学生による作品のプレゼンテーション (※ジェンキンス『コンヴァージェンス・カルチャー』)	事前: 自分の「押し」について、いつごろからか、なぜなのか、考えてくる。創作体験のある学生は、プレゼンテーションの準備をしてくる。 事後: 学習課題の学習	
11	読み物としての社会1	LGBTQIの多様化を、他者理解の様式変容として読み解く。 (※石田仁2019はじめて学ぶLGBT 基礎からトレンドまで)	事前: 「パンセクシュアル(全性愛)」「アセクシュアル」「トランスヴェスタイト」について調べてくる 事後: 学習課題の学習	
12	読み物としての社会2	オリ・パラの歴史を、クラス分けの支配の強化史と読み解く。 (※「東京2020オリパラ競技大会から考える人権社会学」)	事前: パラリンピックの歴史について調べてくる 事後: 学習課題の学習	
13	読み物としての社会3	診察/診断コミュニケーションを相互配慮の実践として読む。 (※ヘリテッジ&メイナード『診療場面のコミュニケーション』、クリスチャン・ヒース、オンラインコメントあり)	事前: 患者の目をみて話さない医師の行動の適否について考えてくる 事後: 学習課題の学習	
14	社会を読む実践1	街歩きをしよう。NHK『プラタモリ』と『路上観察学入門』。あるいは『座席取りの社会学』 (※新之介『地形散歩のすすめ』での自然変化の人間物語化)	事前: 電車の座席に座る人が入れ替わるメカニズムを観察してみよう。その観察結果を、作品=映像、文芸、イラスト等々ジャンルは自由=にまとめて報告できるようまとめてみよう。 事後: 学友のプレゼンテーション結果に感想を書こう。	
15	社会を読む実践2	日常を刺激的にする境界横断的学問としての文化社会学。 (※木村朗子ほか編『世界文学としての<震災後文学>』)	事前: これまでの学習と社会学の関係について考えてこよう 事後: 定期試験の復習	
実務経験				
アクティブラーニングの形式	②反転学習、③ディスカッション・ディベート、④グループワーク、⑤プレゼンテーション、⑥実習・フィールドワーク			
関連科目	「現代社会学入門」(1年前期)、「日常生活世界論」(2年後期)、「ビデオ・エスノグラフィー」(3年前期)			
教科書				
参考書	番号	書籍名	著者名	出版社名
	1.	『<当事者宣言>の社会学-言葉とカテゴリー-』	櫻田美雄・小川伸彦(編)	東信堂
	2.	『全訂新版 現代文化を学ぶ人のために』	井上俊(編)	世界思想社
	3.	『慈悲のポリティクス』	奥村隆	岩波書店
対面授業時に利用するICTツール	Teams, Moodle			

Teamsコード	Teamsコード： 利用する
Moodleコース名および登録キー	コース名： 文化社会学 登録キー： BS2023
連絡手段	連絡手段： Teams および メールアドレス(初回に呈示)
評価方法(基準)	授業理解度把握的定期試験(40%)と複数回の小テスト(60%、プレゼンテーションを含む、但し加点法)で評価し、60%以上で合格とする
学生へのメッセージ	世界は意味に満ちあふれている。そのことに気づくところから「文化社会学」は始まるし、じつは「社会学」も始まるのである。したがって、この「社会学」というものの実践形態と、文芸評論や映画評論の実践形態はたいへん似てくることになる。ということは、次のようなやり方で、あなたの「社会学」を始動できる、ということだ。まず、自分の「推し」にかんする「ディープな評論」を読んで「社会的に」考えることをしよう。具体的には、当該の「評論」が成り立つ仕組みを考えよう。どんな推論が「評論」の背後にあるのか、そして、その「推論」がどのように妥当なものとしてあつかわれているのか、考えよう。ついで、「推し」ではないけれども、関心の持てる範囲の「文化現象」について「ディープな評論」を読んで、同じように考えよう。そうすれば、そこで取られている身振り(過去や他事例との比較の仕方)や、論理操作のやり方(説得力の持たせ方)はほぼそのまま、社会学の身振りや論理操作のやり方なので、あなたは、「(文化)社会学」の学習の入り口に立ったといえるだろう。とにかくやってみよう。うまくいかなかったら、担当教員に報告して助言をもらおう(こそつと自学自習するなら、エスノメソロジーという用語をしらべて考えよう)。
担当者の研究室等	3号館3階の榎田研究室。
スチューデントアワー(未記載の場合は授業の前後)	
備考	10回目授業と14回目授業については、学生同士の「プレゼンテーション」が充実したものになるように「50人教室」を6室ほど予約する予定。(具体的には、創作体験のある学生を、動画映像作品の教室、静止画映像作品の教室、文芸作品の教室、コミックの教室、舞台作品の教室、に分けて、交代交代でプレゼンテーションをしてもらう。ミニ文化祭のような企画を考えている)。また、毎回の授業終了後に、チームで感想を書いてもらう予定(同時に、質問や相談も受け付ける)。授業において創作発表する場合には、資材や機材(撮影機材等)を援助できる可能性もあるので、教員に相談すること。授業外への発表(HP等)の仲介もできる可能性があるため、そのような希望がある場合は、教員に相談すること。
更新日付	